

新版 尖閣列島採集記 多和田 真淳

琉球新報（17 回連載）

1952 年（昭和 27 年）6 月 29 日～7 月 15 日

多和田真淳（たわた しんじゅん）

1907 年（明治 40 年）沖縄県首里市に生まれる。植物学・考古学・琉球歴史研究家、沖縄県師範学校本科卒、国頭村安田小学校訓導を振り出しに西表国民学校教頭、県立第一中学校教諭、知念高校、首里高校教諭等々、琉球林業試験場長、琉球政府文化財保護委員会専門官を経て、沖縄県史編集委員、県森林審議委員、那覇市史編集委員等を歴任。1990 年逝去、享年 84 歳



著者の多和田技官は高良博士より6才年長である。

沖縄植物研究の泰斗であり沖縄薬草の父とされている。

終戦直後の尖閣調査へ、多和田技官が参加したのは幸이었다。

生物相の調査に貢献したのみならず、調査の一部始終を書き綴ってくれた。

高良博士と同様、文才のある著者も素晴らしい採集記を残してくれている。

もしも、彼らの記録がなければ、終戦直後の尖閣調査は、伝説の、まぼろしの調査とされ、口碑でしか知る術がなかっただろう。彼らが貴重な記録を活写してくれたお陰で、往時の調査状況や島の様子を、窺い知ることができる。我々を50 余年前の尖閣調査にタイムスリップさせ、迫真の追体験に導いてくれる。

「尖閣列島採集記」は素晴らしく、かつ貴重な調査報告である。

新聞掲載を「尖閣研究 高良学術調査団資料集」（2009 年刊）に収録した。

その後、多和田真淳、新垣秀雄の両氏が撮影した貴重な写真が寄せられた。

今回、採集記を掲載するに当たり、これらの写真を取り入れて編集した。

「新版（写真入り）尖閣列島採集記」とし、参考資料を添えて紹介する。

1、

尖閣列島の調査から帰って早一カ月半以上日日の業務に追われ追われて今日まで調査報告の遅れましたことを皆様に御わび申し上げます、思い出は楽し、私は資源局へ出しました報告書と旅行日記を頼りに胴乱行脚を書きたいと思います。

それには先ず尖閣列島とはどんな所かということを頭の中に入れて置きましょう。

【尖閣列島の位置と面積はどうなっているか】

地図を広げてください。

尖閣列島は東支那海の一部に散在している一小群島で石垣島から北北西約一六〇キロ石油発動機船で天気のよい日約十五時間、わるい日は二〇時間以上かかります。

宮古島から台湾の北の端へ線を引きその昔女護ヶ島といわれた夢のナンタ浜のある与那国島から北へ垂直に引いた二つの線の交叉点にあります。こゝは台湾の東海岸を北上する黒潮の北東転向点にもあたるので生物地理学上、海洋気象学上大変興味の深い地点であります。

尖閣列島は魚釣島、北小島、南小島、黄尾嶼、赤尾嶼の五小島に沖北の岩、沖南の岩、飛瀬から出来上がっています。東の端は赤尾嶼で東けい一二四度三分、西の端は魚釣島で東けい一二三度二分、北の端は黄尾嶼で北緯二五度五十六分、南の端は南小島で北緯二五度四十四分に位置していることになっています。

魚釣島の面積が三六七町二反三せ一〇歩で最高峰が三六二米、北小島二六町一反、一二九米、黄尾嶼八八町一反三せ一〇歩、一一七米となっています。



南小島の古賀村跡から魚釣島を望む 手前右は北小島
(多和田真淳 1952)

【尖閣列島の歴史はどんなものか】

島々に上陸して貝塚とか、城とかの跡があるか、石器や土器があるか、何でもよい とい角昔人間が住んだ証拠を一つでも探そうとしましたが全くありません。つまり此処は昔からの全くの無人島だったので。然し昔の人はこゝをユクン、クバ島ととなへ漁民や航海者はこれを知っていた様です。

その昔琉球王国の遣唐使は那覇を出帆して久米島へ行き赤尾嶼、魚釣島を道しるべに支

那の福州へ達した様です。

明治十七年に古賀辰四郎氏が発見したと伝えられていますが真の発見ではありません。

又一八四三年～一八四六年英国軍艦サマラン号が東洋探検の途上魚釣島によっています
が之も同様です。尖閣列島は昔から琉球の一部だったのです。然し同列島は長い年月どこの
国のものやはっきり決らなかったのですが明治二十七八年の日清戦役の翌年勅令で日本
帝国領土として八重山郡石垣町に入りました。

今は石垣市字登野城一番地になっています。

▽魚釣島は明治十八年ごろから古賀辰四郎氏の手で盛に開発事業が進められましたが
今はうちやられています。

▽黄尾嶼は大正十年頃古賀氏によって燐鉍採掘事業が初められましたがそろばんが合
わんでやめてしまいました。

▽北小島の海鳥(セグロアジサシ)は同じく古賀氏によって生物標本を作って米国に送
っていましたが明治四二年頃事業をやめています。

これらの島々には屋敷の跡や工場の跡や水タンク等が残っています、魚釣島の工場跡は
まるで小さい御城の様です。この御城の様な石垣がこいの中に今は与那国島の人々がカツ
オの漁期にだけ上陸してカツオ節を半がわかしするクバ(ビロウ)ぶき三むねの工場を建
てています。之が私達調査団の有難い御宿になりました。



魚釣島の古賀村跡に建てられたカツオ仮工場納屋
調査団が宿营地として利用した。(多和田真淳 1952)

2.

【尖閣列島のゆきかえりに何日かゝったか】

初め私は琉大の高良先生から尖閣列島の調査に行きたいが君も調査団に加わらないかと

すゝめられ千才一遇の機会だと胸をワクワクさせましたが、だまっていました。
その中、林務課長さんから調査団の一員として行くように命令されたのでとるものも
とりあえず一行と合流した次第です。

ただしかし悲しいことには私の思う万分の一も仕事が出来なかつたことです。

私の日記には次のように書いてあります。

三月二十九日 晴天午後四時半若葉丸で那覇港出帆、船中一泊

三月三十日 晴天午前十時宮古島張水港着、上陸一泊

三月三十一日 晴天午後五時宮古出帆、船中一泊

四月一日 晴天午前十一時石垣港着、上陸

四月二日 晴天八重山資源支局畜産係の依頼を受け資料植物調査を宮良牧場でやった。
尖閣列島行漁船の便乗を交渉して失敗に帰す

四月三日 晴天尖閣列島行漁船の便乗を交渉して失敗に帰す

四月四日 晴天尖閣列島行漁船篠原光次郎氏所有基本丸に便乗方交渉、船主は納得し
たが、船員が納得しないので困った

四月五日 曇、雨、曇、石垣島東部海岸の採集をした。基本丸船長は納得したが船子が
納得しないので困った



尖閣行き用船には苦勞した。石垣港で漁船を物色している
高良鉄夫団長(麦わら帽姿) (多和田真淳 1952)

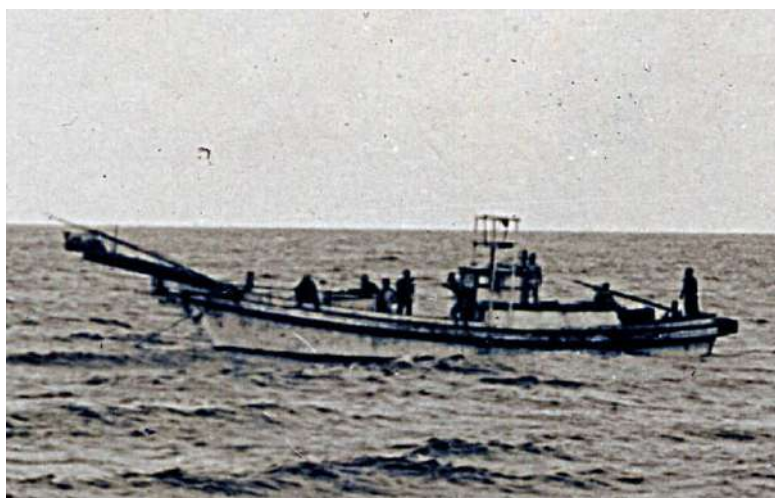
四月六日 曇天、基本丸に根気強く再び交渉船員も調査団に同情を寄せ便乗方を納得

四月七日 晴天だが沖の波が高く出帆延期

四月八日 同上

四月九日 晴天南の風、午後五時尖閣列島へ向け基本丸出帆船中一泊

- 四月十日 晴天、午前八時南小島上陸島の北半採集
- 四月十一日 晴天、南の風、波が荒れ出す、島の南半採集
- 四月十二日 雨天西北風、波が荒い、魚釣島への出帆不能
- 四月十三日 曇天同上
- 四月十四日 曇天(所々青空をのぞむ) 西北風 午後日さす四時半南小島を離れ五時半魚釣島西南岸着、荷物運搬中日暮れ松火を頼りに続行船着場所から崖を越し千米以上離れたカツオ仮乾燥小屋を宿泊所とした
- 四月十五日 快晴北風、午前中荷物運搬 午後竹林行
- 四月十六日 晴天、島の海岸線一周
- 四月十七日 晴天、魚釣岳(和平山)の次山行、山中で日暮れ午後九時半頃帰營
- 四月十八日 晴天、魚釣岳最高峰(三六二米)行
- 四月十九日 曇時々雨、波が少し荒い午前八時魚釣島を離れた、船中一泊、風強く時化気味となり、ずぶぬれになった
- 四月二十日 曇天、午前十時頃石垣港入港
- 四月二十一日 採集標本の整理
- 四月二十二日 同上
- 四月二十三日 八重山資源支局農政係の催しで植物採集会、講師は多和田、午後大雨で一同ずぶぬれになった
- 四月二十四日 午前中標本整理 午後八重山園芸同好会発会式に出席
- 四月二十五日 採集標本の整理
- 四月二十六日 午後七時発動機船で糸満へ向け出帆船中一泊
- 四月二十七日 終日海上で暮す船中一泊
- 四月二十八日 午前十一時半糸満着



篠原光次郎所有の鰹船兼突船「基本丸」(11t)を用船(新垣秀雄 1952)



基本丸の船員と調査団。調査団メンバー:前列左より、多和田真淳。高良鉄夫団長。
2列目左より知念正男技官。上運天賢盛助手、棚原清一技官。(新垣秀雄 1952)

3.

【上陸第一歩】

四月九日晴天、南の風午後五時八重山営林所職員に見送られたが調査船十一トンのカジキ船基本丸は調査団一行七名、船員十一名都合十八名を乗せて石垣の突堤を離れた。

あゝ、今ぞあこがれの未だ見ぬなぞの島尖閣へ、死！今までの採集旅で考えた事のない迷想、ものの十五分も経つたであろうか、あつという間に船は四十五度位に傾いて急旋回した。危く舷側にしがみついて投げ出されずにすんだ。

船員が私を見て笑った、何事だろう、きん張の二三分が過ぎた。

そこへ高良氏から「船員達が海上安全を観音堂へ祈つたのだ、それっ御神酒だ」と茶わん酒を手渡された。ハハー先刻我々が船に乗る時も靴、地下足袋をぬがされたが、今度は観音様への祈願か、今更の如く縁起をかつぐ漁船には驚かされた。

船は何事も無かつた如くトントンと進んで行く、私はカメラをはずして観音崎へ向けた。

夕暗の中に西表島が消えて後はトントンという単調な機関の音と舷側を打つ波の音ばかり、船室の無い漁船の事とてダンブルの上のデツキに船員がにわかにつけてくれた天井、波よけ兼用のキャンバスカバーの下、我々の一等室となった。

「明日は未明に着くでしょう、この調子の南風なら小島は駄目でしょう、どうせ魚釣島ですな」と船長が挨拶に来た。「それがかえつて好都合だ」と私は答えた

四月十日 晴天南の風、寒さで暁の夢は破られ、島が見えるという声にとび起きた。

なる程朝もやの中にすさまじい格構をした島々が見えている。

尖閣とはよくも名づけたり、槍の様にてっぺんの尖った島山だ。

一群のカツオドリが頭上を過ぎた、直ぐ次のが来た、又次のが来た、戦争中の波状攻撃を思い出した。鳥が飛び去る度うす皮をむく様に明るくなって行く、終に太陽が顔を出した。

金波銀波が躍り船は矢の様に早い潮流を切って進んで行く、魚釣へ魚釣へ、急に船は右手へ進路を変えた、おやと思っている中にぐんぐん南小島へ近づいて投錨した。



一行を乗せた基本丸は荒波にもまれながら木の葉のように揺れた。
（「鳥が魚を食べた話 上運天賢盛著」より）

私の胸に割り切れぬものが残った。之が我々の調査をはばんだ第二の障がいとなった。

私はまよよと小船に乗りうつった。

ボートは自然の小さい掘割を巧みに突き進んで南小島に着いた。

我々が海岸に下り立つと島全体が蜂の巣をつまいた以上、否かなえの沸くが如き騒ぎとなった。何千何万とも数え知れぬリュウキュウカツオドリが一度に飛び立ちギヤギヤ鳴きながら糞爆の雨を降らし、右の岩かげ左の岩かげ、山の後へと飛び交い、飛び去り飛び来る、その様は筆舌につくせるものではない。

この地点は島の東北隅にあたる此処は古賀氏が経営した小工場地帯の跡で、海岸からの強い風波を防ぐために大小多数の柵目形の石堀でめぐらした工場や屋敷跡が殆んど完全に残っている。



南小島の古賀村跡が上陸時の宿営地になった。（新垣秀雄 1952）

設営をすべくリュックを肩に四五歩、歩いたら鼻のつぶれそうな喉をしめる様な、異臭がブンと来た。モンパノキの陰に我々より先に上陸したであろう漁民に打ち殺されたカツオドリの胸肉ともも肉をとり去られた後の皮付の頭や脚や翼がうず高く捨てられた無ざんな姿。昼は青蝇にたかれ夜は一尺内外の大むかでにかじられる、何か知ら過ぎ去った戦争が頭にうかんだ、郷里へ残した妻子の姿がチラツと目をかすめた。

私は今から十三年前の天長節に西表島の近くにある中の御神島という無人島で海鳥を殺したり生どりにしたりした経験があるので今度はやるまいと固く決心した。

4、

手早く設営をすまし飯ごう炊さんをして午後から島の北半の採集に出かけた。この南小島はモンパノキ、シロガジマル、クサトベラ、アダン、ムラサキイソマツの他は木が無い、草も全部海岸産のもので山のとっぺんまで海岸植物で占められている。



漁民に打ち殺され、肉をとられて捨てられていたカツオドリの頭や羽の亡骸。(新垣秀雄 1952)

設営地の後方に屏風見た様な岩がそり立ち、その下は岩がくずれ落ちて斜面になっている。シロガジマルが岩と岩との間や時に岩の上に気根を下ろして平たく這いつくばって何処が幹やら根もとやらさっぱり分からぬ。

海岸からくねくねと断崖の下まで一すじの道（というても時々人の歩いた様な草の低くなったの）がついている、イソスゲが一ぱい穂をつけ、ハマボッサとハマダイコンは花ざかりで白、紫と咲き乱れ斜面は御花畑そっくりである。

その御花畑からカツオドリが胸毛をふるわせて一行を不安げに見つめている。

誰か岩かげからとび出した、手に一本の棒切を持っている。

棒が一せんした、と見る間にギヤーと悲鳴を上げ翼をばたばたさせながらカツオドリが飛び立とうとした。また一せん遂に鳥は息絶えた。

ギヤギヤと鳴きながら一群の鳥が算を乱て飛びちがう。空巣には一二個の青味がかった卵が残る、他の連中がこれを拾い集めて袋へつめこむ。飛び立った鳥は直に巣へもどる、竿がきらめく鳥が倒れる、未練を残してトミコウミしているもの、胸毛をふるわせながら巣にがんばっているものは巣付いてから日時のたったもので卵の中はひなになりかけている。この親鳥を殺すのは子を持つ親には中々出来るものではない。

ものの一時間に三十羽もとつたであろうか、卵は袋の三杯につめ余ったものはポケット等へおしこんだ。断崖にたどりつき一番乗りに先ず私が断崖をよじ登る、琉大生上運天君が私に続いた。崖は屏風を立てたようで裏はすさまじい断崖で下は海になっている、これやい

かんと引返した。獲物は晩の食卓をにぎわした。

さやかな満月であつた、青天井に蚊帳をつり、草のしとねに石の枕をして寝た。

何万というカツオドリが我々のろうがごとく、夜びいて鳴いている。丁度昔の豚市場の仔豚が一斉になきわめく声そのまゝだ。この島の生物相は甚だ単調だ、殆んど珍品がない、淡い失望を感じ未だ見ぬ魚釣島に心を馳せている中睡に落ちた。



岩山の断崖、この後背斜面部は営巣生息地となっている。上空を乱舞するカツオドリの群れ（新垣秀雄 1952）

明くれば四月十一日晴天南の風、今日は午前中島の南半を採集して午後は魚釣島へと思うと心がはずむ。一同思い思いの用具を持ち東海岸沿いに皆が張り切つてたこつぼ見た様な水溜を飛び越えながら行く、右手は断崖が続いてとても登れない。

水産課の知念氏がプランクトン網をたこつぼにつこんでは出して一生懸命採集に熱中している、パチリとカメラに収める。

五百米位行くと断崖は斜面になっている。銃を肩にした高良氏が足場を見つけて登り初める、次々とそれに続く、竿がきらめいて又大殺りくが初まった。

鳥は右往左往ギヤギヤと鳴きながら糞爆を落とし初めた。

二三名が蛇だ蛇だと騒ぎ出した、上運天君が腕をまくして生どろろとしている。トグロを巻いた七尺位のシユウダが吞気そうに舌をペロペロ出している。上運天君が左手で尻尾をおさえて持ち上げたら大人しく右手に乗って来た。この蛇は大変臭いと上運天君がいう、道理で臭蛇というんだなとその意味が読めた。此の臭蛇は先島のニシキヘビと似ているが斑紋が無く全体がかつ色である。



南小島の岩山は植生が乏しい、断崖によじ登り調査に励む一行。（新垣秀雄 1952）

此の一带もハマダイコンとハマボツスの御花畑でカツオドリは之等を材料にして巣を作っている、文字通り花のシトネに寝るわけである。岩石にはタカサゴマンネングサが多肉質の葉を茂

らせ星型をした黄金色の花を満開させている。採集に汗ばんだ一同は風通しのよい断崖上で四方の景色をめでながら一休した。

潮の関係で長時間、採集することは出来なかつた。

5.

昼食後、石垣に上って基本丸の帰りを待つ。

一時間、二時間、三時間終に北小島の後ろから姿を現わした。何か信号していると見る間に一人の船子がザンブと海に飛び込んで抜手を切ってやって来た。私は皆の者に合図した。伝令の船子は早く準備して上船するように一同に伝えた。天幕がたたまれ、荷物がまとめられて海岸へ運ばれた。半時間もたたぬ中に風が少し強くなり突然掘割の入口がザワメキ波が立ち初めた。第二の伝令が海へ飛び込んだ。波が逆巻き初めた。



尖閣諸島に生息する無毒のシウダ(臭蛇)
(多和田真淳 1952)

どんな事があっても乗船せねばと腹の中で決めていると、第二の伝令は貴殿方は食糧はありますかとやって来た、今日一日は大丈夫だと高良氏が答えた。今日は波が荒くてボートは出せませんから悪しからずとの船長の伝言です。そうか明日は天気になるから明日にしよう和高良氏が答えている。私は否それはいかん、掘割は駄目だが、東海岸は大丈夫、今日乗らんと四五日はこの島にたてこもらねばならんぞ、皆でボートをかつげばよい、わずか百米そこそこだ、明日は天気になるでしょうと土性調査の棚原氏も延期を主張した。

万事休す、調査団の統制を乱してはならぬ、私は沈黙を守った。二人の伝令は帰っていった。船はアタフタと北小島の影へ隠れた。

急に一陣の強風が吹くよと見る間に風は北に変わり、黄尾嶼の方にあつた黒雲が急速度に拡がり出した。これはいかん暴風になる、私は避難所を探した。よし之だ、設営所の西南方にある洞穴、奥は水タンク辰之水が満々と清水をたゞえている所を選んだ。

一行はテントを上げ荷物を一カ所に纏めて暴風に備えるため大騒ぎを演じているらしい。之も教育だ、今に分かる、私はゆうゆうとタンクに腰掛け煙草を吹かし初めた。

琉大生新垣君がぬれねずみになって息せき切るとびこんで来た。

「ここは大丈夫ですか、私は偵察にやられたんですが」

「大丈夫だよここは」

「先生は初めから大丈夫と分かっていたんですか」

「分かっていたよ」

「そうならそうと教えて下すつたらよいのに」

「駄目だよ教えても、自然に分るよ」
新垣君がとんで帰った。

ぬれねずみの一隊がフウフウいいながらとびこんで来た。

またひき返した、二回ゆききした。唇は紫色になり、歯の根をガクガク振わせながら火が欲しいといい出した。

「君達大雨に山へ野宿した事があるか、大雨にぬれながら、火をたきつけた事があるか」と私は質問した。「それが出来ねば一人前の山師ではない」と私は説明した。

私は海岸に打ち上げられた竹切を拾い集め、おしば用の大事な新聞紙をたきつけに火を起した。それから小枝がそえられ、次に大木の根や難破船の龍骨等がそえられた。

火は煙を上げ終にパツと燃え上った。

「もう四五日は消えぬよ、しばらくろう城だ、決して船は来ぬよ」と私はいうた

米の量が制限され食延し策が講ぜられた。雨足は早く、雨は横なぐりに洞穴の入口を過ぎて行く、海はほうこうを続け、不安が一同を押し包み、たそがれがやって来た。

終に夜がやって来た、私は立って外へ出た。風が強いため南寄の石垣や岩影の枯草はぬれていない。私は一かゝえの枯草（ハイシバ）を持ち帰って草のしとねを作った。他の連中も之にならった。此処に石器時代ならぬ一九五二年型穴居生活が初まった。

翌四月十二日は終日雨、西北風、北小島が見えるだけで魚釣島は、あるかなしか、雲に包まれてはっきりしない。

6.

白い煙が中天に立上った、魚釣島の南岸に五六隻の発動機船が波間に見えかくれするけれども何の手応もない。一時間、二時間、あゝやって来た、大波にゆり上げゆり下げられながら、だんだん近づいて来た。よく見ればそれは二本マストの日本船らしいもので横目でこっちを見ながら島影に消えた。

私は袋を肩に卵の採集に出かけた、食糧の足しにするためである。後ろのしゃ面に登って行った。カツオドリは風の方向にクチバシを向け今日こそは侵略者は来んでであろうと安心し切って巣についている、私はずんずん断崖の根元まで登って行った。それから逆にゆっくり下りながら卵の採集にとりかかった。

即ち風下から行く戦法である、風が強いので勿論私の足音等はきこえない。



嵐に遭い避難生活した洞窟、奥に見える古賀氏が造った煉瓦の水タンク(辰の水)の鳥糞混じった水で、棚原技官(右)が飯盒で米をといている。(新垣秀雄 1952)

上から下へ下りて行くのだからカツオドリの位置は丸見えである。私は小岩の影を這うて行った、ヒョイと顔を出したら二羽の鳥が顔を見合わせ、どうしてよいか分からんという格構をした。手をあげて打つ真似をしたらあたふた転げながら、やっとグライダー式に滑走して逃げた、実にこっけいな姿であった。

次の岩影からヒョイと顔を出した、今度は一羽の鳥が鶏が翼の下に顔をつっこんで寝る格構よろしくという体だ。オイと呼んで見る、答えがないオーイと叫んだらヒョイと頭をもたげ、えもいわれぬ格構をした。私は其処を立ち去った。その次からつぶてを投げ、たやすく飛び立ったものの卵ばかり採集した。

凡そ五六十個は採ったろう、私はずぶぬれになって洞穴へ帰った。

帰って見たら高良氏と琉大生、松本（編者註：正しくは「松元」）君、上運天君、新垣君の四名はカツオドリの測定や剥製に懸命であった。

雨の一日も淋しく暮れ、たき火を囲んで雑談にふける。此処に来てから殆んど顔も洗わなし、飯ごう炊きさんでよごれた手で時々ツルツと顔をなでるし、ヒゲは伸び放題と来ている。たき火にゆらいでいるその姿は山賊そのまゝだ。どうだ、此処に妙齡の女調査団員でもいたら第二のアナタハンものだな、一同がどっと笑った。

笑いながら剥製でくずになった肉をくしにさしては火にあぶってむしゃむしゃほおぼっている。おいおいまるで紀元前百万年の映画そっくりだよ、わっと洞穴内がゆらいだ。

真夜中、火の側に寝た関係で右の眼がづきづき痛み寝れぬまゝ考えにふけていると入口に寝た高良氏がしきりに寝苦しそうに寝返りを打っている。どうしたのかと問うたら、入口からの風で背中がぞくぞくして寝つかれぬという、じゃ交替し様自分はこれからおし葉標本を乾燥せねばならぬからとて交替した。

雨は晴れ上がっているが風は強い、月明を頼りにナタを持って海岸のモンパノキを切り倒しておし葉乾燥用のロストルを作った。プレスのおし葉を上下交互にひっくり返して不寝番をしながら乾燥作業に当たった。

海上ではミズナギドリが夜間作業を終え北小島のねぐらへ帰るのであろう。

海鳴を圧して何十万もががやがや沖の方で鳴き立てゝいる。

夜明だなど思っていると次第に洞窟の入口が明るくなった。

眼は痛むし、無性に寝い、そこに心のゆるみが生じ手で支える代りに紐でプレスを吊そうと色々工夫したのが間違のもとだった。竿の先に紐をくびろうと上にばかり気をとられている中に新聞紙に火がついて二個のプレスが火だるまとなりふみつぶすやら水をかけるや



南小島から憧れの魚釣島を望む。カツオドリの卵や肉で飢えをしのぎ、迎えの船を待つ。(新垣秀雄 1952)

ら皆が総立ちになって大騒ぎを演じた。お陰で半こげの余り価値のない標本が出来上がった。狂おしい感におそわれた。まゝよと頭をかゝえグルッと横になって寝入ってしまった。

7、

四月十三日は終日曇天で波が荒く魚釣島への出航はとても不可能だという事が分かっていたので一同食糧補給のためカツオドリと卵の採集に出かけた。

私は留守番をすることにした。食延しにした米はいよいよ残り少なくなり、テントを払げてブリキカンに溜めた飲料水は切れ、海鳥の糞便をくぐって来たすっぱい飲めばますます喉のかわく辰の水に一同がいららし、大殺りくに出かけて行く後姿に同情の念禁じ難しという訳で、何とか工夫は無いかと色々考えた末、私は洞穴付近の小高い岡に枯草を集め非常信号のノロシをたいた。



洞穴生活も長くなると、戸惑いも隠せない。焚火を囲んでの協議か？ 左より高良団長、棚原、知念技官。
(多和田真淳 1952)

四月十四日曇天西北風だが風も大分弱り時々青空をのぞむ様になった。

この調子なら午後までには波もおさまるだろう。そうしたら船の連中も我々が食糧の欠乏している事は百も承知しているからきっと迎えに来るに違いない。午前中思い思いに採集をして午後は準備して待とうじやないかと評議一決、私は島の南端指して出発した。

南端は此の島にしては広大な沖積層というより波に打ち上げられた砂れくを大波が一樣にのして平坦にきたとでも形容した方が適切な平地があって、その所々に名人が配した庭石に必適する奇石がポツンポツン置かれている。

この一帯は余り荒らされていないと見え平地までもカツオドリが進出して安心して巣づくりしている。人が近づいても一向無関心である、石を投げたら珍しそうに一寸首をかしげるだけである。

此处で初めてまめ科の植物にぶつかつた。ハマナタマメとハマアズキであった、やつとアダマンも見つかった。一面青草で敷きつめられているが種類が少なく至って単調である。

向の岩影から悲鳴を上げながら一群のカツオドリが飛び立った。よく見ればいつの間に来たのか棚原氏と上運天君が鳥の捕獲に秘術をつくしている所だ。

棚原氏は棒を以てほふく前進しているし、上運天君は立膝のまゝゴムのパチンコを思いきり引きしぼっている。五六尺位前にキヨトンとカツオドリがすわっている。

上運天君の右手が動いた、ギャツと悲鳴をあげて鳥がひっくり返った、棚原氏の棒がきらめいた、鳥がびっこを引いて逃げて行く、全く映画そつくりだ。

私は帰りに昼食の菜にするためハマダイコンの若いのを一抱え採取した(之は実にはうまかった)。帰る途中左手断崖を辛じて下りた動物班と合流して正午帰営、昼食後荷造りにとりかゝつた。

午後二時になっても迎いの船が来ないので一同がっかりして中には溜息をつくのもいる有様、私はたこつぼの無数にある瀬へ出て、海そう類、カニ類、貝類、魚類を観察していた。大きな潮のうねりがどつと来て瀬を洗った、私はおやっと思った。目前の池を大きな魚が踊って穴へかくれた。私は以前西表島にいた時分こんな水溜で十六斤半の魚を釣竿の根で突ついてとつた経験があるので、しめたと思った。なぜならこの池は袋になっていて逃げ路がない、私はとんで洞穴へ帰った。棒をひつつかんでまた海へ出た、何事だろうと棚原氏が追うて来たので二人で水中をドタンバタンやつてやっとな棒でしとめてしまった、六斤位のイラブチャー(ベラ)であった。船を刻むの例にもれず、私はウの目たかの目別の水溜を丹念に棒でつゝいて魚を探した。

不意に大声で呼ばれ顔を上げたら、いつの間にか待ちに待った我が調査船基本丸の雄姿が浮んでいた。四時半南小島に分れを告げ、うねりの未だ去りやらぬ海上をゆられて魚釣島へ向かった。船頭からふるまわれた真水で沸かした清明茶と、アブラガツオの刺身は今もって忘れられない。

船は四十分で魚釣島の南岸に近づいた。最高峰三百六二米の和平山は海岸にせまり肌に粟を生ぜしめる程ひと私の心を威圧した。これこそ死の断崖だと私は絶叫した。

船は底知れぬ紺青の海をゆっくり左手西海岸へ宇廻して五時半魚釣島西南



洞窟での食事光景。煮炊きは野戦用の飯盒で、蓋は食碗にもなる。中央が高良団長、多和田技官は右隣で煙草一服。(新垣秀雄 1952)



嵐がおさまると基本丸が姿を現した。魚釣島に向かったが、しけのため宿営予定地には船は着けられない。(多和田真淳 1952)

岸に錨を投げた。魚釣島も海岸から直ぐ深海となっているので珊瑚礁の割目が少なく船着場は二三カ所しかない、海岸を黒潮が洗って流れは川の様である。

そよ風が吹くだけでもここに面した海岸は波が逆巻くのが特徴である。

8、

今日は西北風なので我々の宿泊地である西北岸に船を着けるのは困難である。我々は二千米近いしかも断崖から崩落した石の間を縫ったり越えたり、或は断崖をよじねばならない様な悪道を往復せねばならなかった。

海岸に下された荷物は屏風のように突出した小さな半島状の断崖を越さねばならない、その時役立ったのは断崖上から吊した二本のロープだった。私は断崖上で荷物を引上げる役目をしていたが百米位離れた崖下ではげしい大きな物音を立て、煙と共に物の飛散るのを目撃した。その近くには我々のボートがもやっであつた。

私はボートが割れたのだと思ってびっくりした、よく見ればボートはちゃんと岩影にあつた。多分何かの原因で岩が崩れ落ちたに違いないと思った。



宿営地の古賀村跡に行くには岩崖を越えねばならない。高さ10数メートルの断崖をよじ登り、荷物は2本のロープで吊り上げて揚げる。危険な技だ。(新垣秀雄 1952)

先発隊が荷物をかついで宿泊所へ急いだ。夕やみがせまって来て我々を包み、あたりは真

のやみとなった。やぶ蚊が所きらわず襲撃して我々は一刻もじつとすることが出来ない。

生まれて初めて経験する猛烈な蚊群の襲撃、荷物をかつぎ手さぐりで崖を下りたがさっぱり方角が分からない。じつとすることは出来ない、動かねばならぬ、蚊に攻め立てられて無茶苦茶に歩き出した。

先発隊の一人松本君が松火をふりふり合図しながらやって来た。救われた気になった。宿泊所近い海岸で高良氏が流木を赤々と燃やして我々を迎えてくれた。

何でも御城のような石垣であつた。トンネル見たような石門をくぐつて家の土間に立った。土間には直接クバの葉が幾重にも敷かれ割竹で押えてあつた。

これが魚釣島における我々のねぐらであつた。

翌十五日は快晴、北風、久しぶりに家の下に寝て熟睡、気持ちがいい。

とび起きると同時に泉へ行く、小川をせいて作った水タンクは同時に井戸の用を兼ねるように出来ている。満々と湛えられた真水、手にすくつた玉の様な清水、喉へ転げ落ちる甘露の味。小島の生活に較べなんと環境の異なる事よ。

見よ我々の周囲には亭々とクバ(ビロウ)が天に沖し、さらさらと風にゆれ、小川のせゝらぎと妙なる樂をかなで、クバの葉影タブの茂みではヒヨやカラスバトがこの世の幸を歌っているではないか、幸先はよし、あくがれのあくがれの此の島山の未知の植物に対する武者震いで私の好奇心は高まっていた。

クバの屋根、クバの壁、タブの柱の仮小屋も此処無人島では宮殿の様に輝いて見えた。

今日の午前中は残して置いた荷物の運搬作業、午後は古賀氏が植栽したという竹林行き



上: 古賀村跡の石積み。納屋の屋根が見える。(新垣秀雄 1952)

下: 脇石積みを背に撮った記念写真。前列左より多和田技官、棚原技官。上運天助手 後列左より、松元助手、高良団長。(同上)。

と決めた。朝飯の前に手の空いてる連中は荷物の運搬にあたった、二往復で運搬は終わった。
汗ばんだ体に空腹を覚え、琉大生の炊いた飯ごうの飯、野生のボタンニンジン¹の芳烈な味噌汁、無人島ならでは味わえぬうまさであった。

竹林は西海岸に面しただらだら坂の奥にあった。道という道はなく、一昨年²の記憶を頼りに高良氏が先導になってやぶを切り開いて進んだ。やぶの入口には葉の広大な紫色の美花を開くアザミがあった。私は新種と見て之にセンカクアザミの仮称を与えた。

海岸からの絶えざる強風で入口の灌木は枝と枝を組み合わせてどっしりミコシを据えているので我々は腹這いになって通らねばならなかつた。中腹のビロウ、タブ、モクタチバナ等はよく生長して熱帯林の特徴をよく現わし昼もなお暗い有様である。

ビロウは丁度実が熟し、地面は青色の実で敷きつめられている、此処のビロウは今まで見たものとは幾分異っている。即ち葉の柄も長ければ、花の枝も長く、実も長い、たしかに普通に我々が見るものとは別種と思われる。モクタチバナも今まで見たものとは異って実が非常に大きい、甘いので私はとって食べた。

動物で著しいのはクバの葉柄に七八寸以上の大ムカデの住んでいること、跳躍力のすばらしいカエルが居ることである。植物では琉球列島では新産のツヅラフジの一種があることで、之は花も実も無く、芋を掘って持ち帰りたかったが、残念な事には根掘のピツケルを他の連中が借りてしまったので採集する事が出来なかつた。

リュウキュウカラスバトは山羊の様な鳴声で木から木へ飛び回っているが、感が早く中々射てなかつた。竹やぶの竹は釣竿用のホテイチクで乱伐をされ辛じてある有様で保護育成の要があると思った。

晩は蚊の襲撃がひどいので明日は島の海岸線一周と決め早く寝た。

9.

四月十六日、晴天、午前八時宿舎を出発西海岸を北に向かった。

五百米位行った海沿いの小高い岡に登って一同ど肝を抜かれた。何万坪という山が、土砂巨岩、大木が吹き上げられ、木は時に横倒しにされ、大部分は枝が土砂に埋められ、巨岩の下敷きとなり、むごたらしく土塊の着いたまゝの根を天にさらけ出している。山手に著しい地すべりの後も遠望される。もみくちやにするとこんな状景を形容するのに適切な言葉ではないかと思った。これは断層、地す



島の斜面はビロウ(クバ)に覆い尽くされている。丈は高く、葉柄も花の枝実も長い。(多和田真淳 1952)

べりの地殻変動か、或は噴火の跡かと議論百出した。

三カ年前は草も無く全くの赤はげ山だったらしい。今はヒゲスゲ、デンツキ、ウスベニニガナ、タカサゴマンネングサ等が所々に生えている。此のはげ山はすり鉢形をなし、中央には火山の跡らしい水ためもあってわずかながら水草も生じていた。結局我々の知識では解決のつくはずはなく疑問のまゝ問題は残された。伝え聞く所によれば一九四七年の九月近海を通る船がしきりに立ち昇る噴煙を見たともいはれている。

一時間も調査して前進という事になってから上運天君が未だ来ていないことに気づき、松本君が宿舎へ合図に引き返して行ったが、何を聞きちがへたか上運天君は反対の方向に出発してしまっていた。彼はこの一日で千じんの功を一キに欠いてしまった。

しばらくして我々は北海岸を巡り東海岸へ出た。東海岸は天候異変がひどらしく三四隻の大型発動機船が岩にたゞきつけられ、打ち上げられ船体が芭しょう葉の如く無茶苦茶にされた痛々しい姿が見える。魚釣島で遭難した日本機のエンジンや翼のところがっているのもこの東海岸である。



人知れず咲き誇る可憐なテッポウユリに、調査団は心を和ませた。(多和田真淳 1952)

飛行機の衝突した岩は真二つに割れて黄色に染まっている。

東海岸は珊瑚礁も発達してあるいは波打際から畳を敷いたようなものがあるし、あるいは累々とトリデの如く巨岩が積重なつて人の行手をさえぎるようなものもある。前者にはミズガンピやシロバナノミヤコグサが生じ、その割目には幾万とも知れぬテッポウユリが群落を作り今を盛りに咲いていた。後者にはクサトベラやアダンが所々群落をなしていた。

我々は垣々たる珊瑚礁を過ぎ、岬々たる珊瑚礁の岩山を曲芸師のように跳び越え南海岸に出た。この海岸は旧噴火口の壁とも見られるところで身の毛もよだつくらしい断崖が鋸の歯のように続いている。この海岸には閃緑岩が露出して特異な存在を誇っている。昼過の日光はいやが上にも照りつけ、飲料水も無いので一同うだつてあえぎあえぎ岩角をつたつて行った。

沖縄では普通であるが此処では極稀なノアサガオやウスベニニガナ等を採集している中に一行にはぐれた。私は大急ぎでましらの様に岩鼻をつたつて行く中はたと行手を失ってしまった。そこは小さい断崖をなしていた、私は彼等を大声で呼んだ。返事がなかった。

私はまゝよと前方の平たく突出た石へ跳びうつつた、その拍子に石がひっくり返って諸共に断崖へすべり落ちた。あゝ然し幸な事には岩が屏風の折目の様になって下に行くに従って狭まり、私は岩と岩との間にうまい具合にはさまつた。そこは岩がぬけて崩れ落ちた跡らしく人一人通れる自然の小路になっていた。それが一行の通つた只一つしか無い道であつた。私はほつとして野冊を拾ひ上げリュックサックをかつぎ直し大きな岩角を急いで巡

って行った。人声が聞え、小さい流れから水筒に水をつめている一行がいた。この流れの段々畑の様な所を水がチロチロと下まで流れ、湿地には西表島のヒルギ林に生える稀にしか見ないウシクグが勢よく生育していた。

我々はこの段々を下りて海岸に達した。海岸に下りて一同は目もあてられない位失望落たんした。閃緑岩の岩壁が海に突出て岩鼻が直角に切れている、人間業ではとても廻れない。

しばらくあつけにとられた一行は勇をこして右手の斜面を一步々々シロガジマルやリュウキュウアカテツの枝につかまって登った。あゝ然しやと登りつめた所は又断崖では無いか、不用意な事に誰もロープを用意してなかった。高良氏を先頭に私が殿を承って一人々々ゆっくりゆっくりこの死の断崖を登った。私は大声で叱たした。



魚釣島は緑の魔境、生物地理学上特異な位置にあり、生物資源の宝庫である。(多和田真淳 1952)

「落ち付いて登れ、誤って石を転がしたら下の者は命が無いぞ」とくり返した。

人間はこうなると異常な心理状態になるものである、自分が下になるのをいやがるものである、あわてた新垣君が石を転がしてしまった。最初の一個がするどいなりを立てゝ私の顔にせまった。私は反射的に出た顔を引こめてびしゃりと頭を岩にくつつけた。私の帽子すれすれに石は谷底へ転げ落ちた。

次々と二個の石が転がって来た。知念氏が一個は荷物で、一個は足でふまえた。

私は怒心頭に燃えた。しかし其処には同君の姿はなかった。

10、

此処では皆が尋常の状態ではなかった。

高良氏がノートを紛失し、ナタをも紛失した。さがしてくれと大声でどなるけれどもさがす者としていなかった。

断崖を登りつめた裏手は皮肉にも又断崖であつた。此の新しい断崖を下りる訳にはいかない、なぜなら下は深い海であるからだ。

一行は右へ右へとそろそろ嶺づたいにやと谷間へ下りる事が出来た。

谷間に下りて又協議が初まった。後は海であるし、左手は断崖右手は今下りたばかりの山だ、進退きわまるとはこのことである。



行手を阻む険阻な断崖、これらを物ともせず岩に齧りつき登り進む。(多和田真淳 1952)

我々は活路を見出すべく谷間を前方へそろそろ登って行った。

一人々々或間隔をおいて万一前の人が悪って石を転がした場合危険を防ぐための間隔がある、今度も殿は私が承った。谷を登りつめた所は小さい平地になっている、左手は断崖でとても登れないので高良氏の意見で右手を断崖に副うて峯を越そうというのである。そこは全くのジャングルである。皆がジャングル内の猪に見えた、どう言うわけか知らないが少しでも人より先になろうとする。

岩の断崖は土の断崖に変わった。

我々はこの断崖をよじて和平山の麓に出て太陽を目あてに西へ西へ進む事に決めた。

木の根やクロツグの葉柄等を命の綱にして登った。採集するのは私一人である。珍しいのはポケットやズボンの間に押し込む、だんだん前の連中にひきはなされた。オーイオーイと叫んではその声を頼りに進む、時々浮いた石を前の人はずり落したのがすさまじい音を立て、飛んで来る。木の根にぶつかって方向転換をして谷間へ落ち込んで行く、全くひやひやさせられて命の縮まる思いだった。

やつとの事で山の頂上帯に出た。太陽は大部西に傾いている。

休む暇無く前進が続けられる、此处から急に下りになり植物の様相も変って下草類が地表を被いかくし、樹幹にはこけ類やしだ類がぎっしり着いて見事な植物景観だ。

狩人に追われた猪の如く皆が歩くというより転がると形容した方がよい様な格構で無茶苦茶に谷間へ下りて行く、ふと私は頭上の大木を見上げた。樹幹から水平に出た太い枝にこれは又見事な数種の珍しい蘭がのっかっているのではないか。

オーイ待ってくれ今私は珍しい蘭を見つけたからそれを採るまで待ってくれと叫んだ。

オーイと下の方で返事があつた。私はリュックサックとプレスを下し身軽になってすると木に登った、私はしばしこの蘭の一群に見とれた。

リュウキュウセッコクの中に混ってバンダ系と思われる珍種がある。

一寸見た所はイリオモテランだが様子が異う様にも思われる。ヨウラクランは小さいながら扇の様な葉を広げ桃色の花房をヨウラクの如く垂れ下げて満開している。

私はおもむろに之等を採集した。今日は之で満足だ。今までの苦しみはたちまちで吹飛んだ。私は身軽にとび下りて彼らの後を追うた。誰も待ってくれなかつた。オーイと叫んだらるか下からオーイと返事があつた。左手が西である。彼らの向かっているところは東であつた、変だなど思つたが致し方なかつた。時計は五時をまわっていた。彼等が東海岸への最短距離を選んだのは無理からぬことであつた。

クバの茂みで高良氏がやつとの事でカラスバトを射とめた、後にも先にも之が調査団唯一のカラスバト標本であつた。夕日が海にうすづく頃我等は東海岸へ出た。



山頂域の樹幹上に着生した希少種のイリオモテラン。(多和田真淳 1952)

其処から宿舎までは半時間とはかゝらなかつた。我々はかなり疲労していた。

夕食前に気付薬として琉球泡盛の小量が振舞われた。日頃は舌に辛い泡盛もその日だけは甘く感じた。就寝前松本君と明日の和平山行を約束して寝についた。

11、

四月十七日晴天、松本君と二人して先ず昨日の新噴火口と覚しき所から和平山の頂上を遠望し、しゃ二無二一直線に進む事に相談が纏まり、その通り実行した。

登り口は縦に帯状の湿地帯であり、そこにヒメガマ、ミズスギ、オキナワチドリ、ナメリツノゴケ等のこの島では今まで見た事のない植物を採集しながら進んだ。

此の島はアブが多いが、特に此の湿地帯は追えども追えども後からうるさくつきまとうぐらい多い、油断すると洋服の上からでも地下足袋の上からでも刺す。

湿地帯の上部は木生羊歯のヒカゲヘゴが多い、ヒカゲヘゴの茂みをくぐりぬけて密林へ入った。急に様相が変わって平地となり、ピロウやウラジロエノキの亭々として天にとゞくかと思われるものやタブの巨木などが勢よく茂って雄大な感を与える。

地中には大ミミズがせい息していると見え、猪がたがやしたように糞が散乱している。土もふっくらと柔かく理想的な森林である。道は爪先上りとなりだんだん角度が大きくなって来た、が然し昨日に較べて非常に楽な地形であることはこれから先も予想された。三合目あたりで断崖にぶつかつた。左手しゃ面を廻って断崖の上に出た。これから先は急しゃ面であるが、下から上へ巨石が階段状に積まれているので木の根や藤づるをつかむ必要も無く呑気に心よいまゝ採集することが出来た。

此の一带にミカンの木の一抱えもある大木が相当あって面白い事には花も咲いているし、実も熟している。一寸見た所シークワシャーやタチバナに似ているが、実の小さい事と必ず黄熟すること実が甘いこと、頭が必ず斜に傾むくので別種である。新種と思われるので私は仮にセンカクミカンの名を与えておいた。

此の辺の岩壁で私は未だ採集したことの無いホラゴケを採った。だ円形をしたホラゴケは聞いた事が無い。これも新種と思われるのでセンカクホラゴケの名を与えておいた。

松本君が同時にカタツムリの一種をとつた。甲らが平たく体がナメクジの様に馬鹿に長く紫色を帯びているのが特徴でさわるとミミズの様にピンピンはねる全くの珍種である。これと同じカタツムリが他の場所で棚原氏により採集された事も特記して置く。



木々が鬱蒼としたジャングル内は昼なお暗い。左より高良団長、知念、棚原技官。
(多和田真淳 1952)

我々が之等の珍種を採集した場所は斜面の一番上で之から上はやゝ平たん地になっている。この辺が八合目位だと私は見た。

昼食後、その平たん地を横切り木の間をすかして青空の見える所を避け、見えない所へ所へと進んだ。我々は今度はとても大きな断崖へぶつかってしまった。これじゃ和平山の頂上へ登れぬじゃないか、突破口を発見することだ、というので左手へ廻って見たが見込がない、

今度は注意深く右手へ廻った。日は大部傾いて日光も弱ってきたらしい、まごまごすると今夜は野営だぞと話しながら足元を見てとび上った。

赤紫色の小さな愛らしいツツジの一輪がこぼれ落ちている。

私は反射的に上を仰いだ。

あつたあつた、断崖を這う様にしてツツジの枝が岩間を流れ赤紫の花房がぎっしり付いて私を喜び迎えている。思わず新種だと叫んだ。

松本君がびっくりして寄って来た。そこに岩の割目があって、あゝ何と見事なツツジの群落であろう。私はこんな美しいツツジを琉球で見たことがない、全くキリシマツツジの群落そのまゝだ。私は世界一の大花を開く珍しいツツジ火山島（方言名ウスフィンガマー）を採集に来て別のもっと珍しいツツジを採ったのだ。

やっと我に返ってあたりを観察した。ツツジの古木は根廻り一尺以上もあるが、面白い事に此のツツジは枝が下垂して地につけば、たやすく発根して独立した個体を作り、次から次へと繁殖して行く。ツツジの蔭の土はオウタニワタリの根の様にふっくらとし、そこにはシマキクシノブやヒトツバが生えていた。



断崖を這うように赤紫の花が咲きこぼれていた。一目見て「新種のツツジだ」と叫んだ。喜び撮った写真がこれである。（多和田真淳 1952）



カラー写真だと、センカクツツジが小ぶりで実に愛らしい。尖閣諸島の固有種である。（新城和治 1979）

12.

私はパチリパチリと矢鱈に写真機のシャッターを切った、此処は山の頂上であつた。眼下に総べてを見下すことが出来た。私は後の方を見た。そこには呼べば答えんばかりの所に今一段と高い檜のような山があつた。てっきり和平山と思い込んでいた私の考えは間違

っていた。しかしこの山より高い山は一つしか無い、私はこれに次山と名づけた。

次山一帯にはナンゴクモクセイが多く、紫の実が枝もたわゝに生っていた。

枝々にはバンタ系の蘭がぎっしりついていて、他の木にもぎっしりついていて、

日が西にうすづいてたそがれ初めた、我々が西に向かつてぐんぐん歩いた。

我々の歩いている左手は直ぐ断崖でその下が海になっている、即ち我々は断崖の上をしかもその縁を歩いているのだ。潮さいの音が聞えて来る、クバの葉ずれがそれを打ち消そうとする。潮さいの音が聞え無くなると聞える所まで寄って行っては前進を続け、時々断崖に出ては方向を定めて進んだ。

森の中の日は暮れやすく遂に足元が見えなくなった。我々は木の間がくれに見える星を目当にした。「せいては駄目だよ、こうなったら持久戦だ、いつかは目的地に着くよ」と私は松本君にいうた。

「先生物が見えません、懐中電燈をつけましょう」と松本君はリュックサックを下そうとする。「いやいかん、君明かりをつけたが最期、大変だよ、君等は経験が浅い、もしこういう所で電燈でもつけてごらん、同じ道をぐるぐるどうどう巡りをしてとんでもない事になるよ」「幸此の島には毒蛇がいない、どんなところに足をつゝこんだつていゝんだ、たゞ転んで怪我をしない様に注意し給え」と励ました。

道が(仮に道と名付ける)下りになり、でこぼこだらけになって岩に突当たったり岩をとび下りたり苦しい行軍がしばらく続いた。二三回と無く左手海岸へ下り様と木の間を出て見たが、其処は断崖で我々は引返さねばならなかった。腹はへるし、疲れ果てゝ二人は黙々と歩いた、私は決して松本君を先にしなかった。山の感は私が上だと自信があったからである。

苦斗三時間余、眼前がかつ然と開けススキが原へ出た。眼下海岸にタキ火があかあ

かと照っている。タイ松が右往左往しているのが手に取る様に見える、オーイと叫んで懐中電燈を輪に振つて見た、オーイと返事が聞え一層タキ火が燃えさかった。

オーイオーイとだんだん近づいて行った。ススキが原は草原に変わり草原の中央に一条の道があった。その道に沿うて我々は遂に泉の近くにたどりついた。

高良氏の計いでタキ火がたかれ手分けをしてさがしていたという、私は思わず眼頭が熱くなるのを覚えた。丁度夜の九時半であつた。

一同は私の説明するセンカクツツジに見ほれた。この島へ来て長高峯をきわめぬのは調



無数のビロウが生い茂る林内は、陽が傾くと暗くなるのが早い。闇夜の決死行となる。

(多和田真淳 1952)

査団の恥だ、限られた日時も余す所後一日だ。明日は是非魚釣岳(和平山) 行を決行しようじゃないか、珍しい蘭類がどっさりあるし、諸君の御土産として人々に喜ばれるよ。棚原、知念、松本、新垣の諸君がこれに賛成した。

四月十八日晴天、今日はこの島の最高峯(棚原氏は魚釣岳と名づけた。元来和平山とは魚釣島全体の名称だから私も魚釣岳と称えた方がよいと思う) をきわめる日だ。

八時半宿舎を出発、新垣君がにわかにはげしい歯痛におそわれ残ることになった。

昨夜松元君と下りた宿舎の後の泉をさかのぼることにした。誰が焼き払ったか知らんが、多分漁期の食糧を確保するためサツマイモでも植え様と計画したのであろう。相当面積の焼野ヶ原があってそれに一条の道らしいのがついている。昨夜の草原の中央に一条の道というのがそれで行って見たらそれは道では無く自然に出来た排水溝であった。

昨夜の記憶をたどってずんずん登り、右手の山を魚釣岳の方角へ進んで行った。我々は進みながら木の枝やクバの葉を折って帰りに役立つ目じるしにした、今日になって昨日通った道は暗夜の事とてずい分無駄な骨折をしたという事が分った。昨日のコースはこの島で最も重要な最も楽な唯一のものであることも分った。

13、

二時間後には一行は次山に達していた。峰通り一帯には無数の蘭類羊歯類が樹幹に付着しているし、崖にはセンカクツツジが満開している。小躍りして喜んだ一同は片端から、これを採ろうとする。

私ははやる心を押えなさい、あれを見よ、あれが最高峯魚釣岳だ。トケンの血を吐いた如く真赤に岩山を染めている



魚釣島の次山(標高 320m) から最高峰の魚釣岳(同 362m) を望む。(多和田真淳 1952)

のはセンカクツツジだ。向うには蘭類もどっさりあるから向うで採る様にしよう、御昼の弁当も最絶頂で天下の絶景をきわめながらやろうじゃないかと云うた。

皆が賛成してすぐ行軍を続けた。

一時間で魚釣岳の麓に着いた。我々のたどり着いた場所が幸にも登り口であった。

木はだんだん低くなってこけむし、土は柔かく岩石も肌は皆地衣類やセンタイ類で被われ、切立った岩へシヤリンバイやイヌマキが強風に振り落されまいとしがみついている有様が南画で見るすみ絵と全く同じだと感じた。

こんな景色は此の列島を除き恐らく琉球にはあるまい。木の根木の枝を頼りに或は岩と岩とせまくなった所を腹這いになってやっと頂上に達した。

何十万年否何百万年それよりも遠い遠い昔、国の出来初めから幾多の天災地変に出会い今やっと辛じて残ったこの絶頂、支那大陸と地続きであつた時代、それから三回も琉球列島

が海底に沈み、又浮上り其の間に陸地が離ればなれになって各島々が出来たのをこの絶頂は見たであろう。も早年ふり岩石はゼイ弱となり崩壊の一步手前まで来ているのである。

南側は三六二米の恐しい断崖で一寸体をのり出せば死魔の引力で今にも引ずり込まれそうな気がして肌に粟を生ぜしめる。

出発の際に頂上で小便をたれると豪語したのも居たが結局それは豪語に終わった。

各人が適当な岩を背にして御昼の弁当を開いた。御土産の蘭類センカクツツジは各人のリュックサックを満たした。私は岩石に付着した珍しい地衣類を幾種か採集した。今まで伊平屋島でしか採集することの出来なかつたコシヨウノキを採つたのもこの頂上であつた。

さらば魚釣岳よ、恐らく再び君と会う日はあるまい、限りある人間の命、あゝ俗塵、慾に明け暮れ自分よりすぐれた人を引きずり落そうとする有象無象、淋しさは私一人のみであつただろうか。私はこの辺で採集記の筆をおき度いと思います。



掘割前に迎えにきた基本丸。手前は調査団の荷物。(新垣秀雄 1952)

とに角翌四月十九日午前八時小雨そぼ降る魚釣島に分れを告げ、時化気味で波も荒かったが、我々は勇をこして出発しました。

夜中船はバリバリ音を立てた、波は我々のデツキを洗い、ずぶぬれのまま丸二十一時間、ゆられゆられて四月二十日午前十時ごろ石垣港に無事に着きました。

皆の顔がやつれて目が落ちくぼんでいました。私のぼうぼうとしたひげを見て笑う人もいましたが私は笑う気になりませんでした。

栈橋に下り立った皆の顔を見て私が涙ぐんだのは事実です。

なおそれ以上尖閣列島について知りたい方はお便りでもお願いします。

・・以下中略 (了)

※編者註：14～17の【尖閣列島の地誌的考察】、【尖閣列島の生物相】、【尖閣列島の植物フロラ】、【尖閣列島の植物生態】、【結語】については割愛しました。

また、本文中の句読点を追加及び変更しています。

参考資料 1

調査異聞

学術調査団出発、数日後、琉球政府創立 尖閣調査は、沖縄の学問、行政の黎明期に行われる

1952年3月29日の紙面（琉球新報）は2つのできごとを小さく報じている。「尖閣列島学術調査団 きょう出発」「政府創立式典 琉大生も出席を」がそれである。後者には、「琉球政府創立式典は4月1日あさ9時より琉大校庭で行われるが、特に琉大当局では首里在住学生の参列を要望している」とある。

さらに「琉球政府発足の記念切手 臨時局も設ける」と報じ、「琉球政府創立記念切手は…平和のハトと新発足をあらわす双葉をあしらった図案で、原画は琉大生安次富長昭君の作（額面）…創立式典当日はとくに式典会場の琉大構内に臨時郵便局を設け…一般郵便物の引き受けをする」とある。

1951年2月、旧首里城跡に琉球大学が開学した。

その1年後の1952年3月、第二次高良調査団が、尖閣へ向け出発した。

沖縄の自然科学研究の振興に寄与するとして志喜屋孝信学長や島袋俊一農学部長らのあと押しをうけ、全学挙げての大きな期待を担った尖閣学術調査であった。



設立式典で就任あいさつを行う比嘉秀平行政主席
「戦後50年の歩み—激動の写真記録—沖縄県」より

出発数日後の4月1日には念願の琉球政府が発足した。

琉球政府は創立当初は、建築中のため庁舎がなく、53年に政府ビル（註：下段切手に表示）が完成するまで焼け残った戦前の勸業銀行官舎跡（那覇在）を利用していた。

創立式典が大学構内で行われたのは異例であり、終戦直後の沖縄の政治的混沌・模索を象徴していたと云えようが、戦禍の瓦礫の中から沖縄の復興・再建を担う学問の殿堂は構築され、宿願の行政の府は漸く産声をあげ、新生沖縄づくりのスタートだった。

地元沖縄が誇り記念とすべき尖閣合同調査（第二次調査）は、奇しくも新生沖縄の学問、

行政の黎明期に行われたことがわかる。



琉球大学開校記念切手
(1951.2.12 発行：軍票B円)
安次富長昭氏原画



琉球政府創立記念切手
(1952.4.1 発行：軍票B円)
安次富長昭氏原画



琉球政府創立十周年記念切手
(1962.4.1 発行：米ドル)
玉那覇正吉氏原画

※本コラムは「尖閣研究 高良学術調査団資料集 2007年刊」より転載した。

なお、琉球大学開校記念切手と琉球政府創立記念切手は、安次富長昭画伯（当時琉大生）が原画を作成した。その20年の1971年、琉球大学尖閣諸島調査団は、アホウドリが生息しているのを発見した。琉球政府郵政庁はその偉業を称え、記念するため、尖閣アホウドリ切手を発行した。奇しくも原画を担当したのは安次富教授だった。

参考資料 2

第二次高良調査団メンバー



高良 鉄夫 (39)
琉球大学助教授



多和田 真淳 (45)
琉球林業試験場技官



棚原 清一 (29)
琉球政府資源局技官



知念 正男 (31)
琉球水産研究所技官



松元 昭男 (25)
琉球大学生物科 4年



新垣 秀雄 (22)
琉球大学農学科 4年



上運天 賢盛 (21)
琉球大学生物科 2年

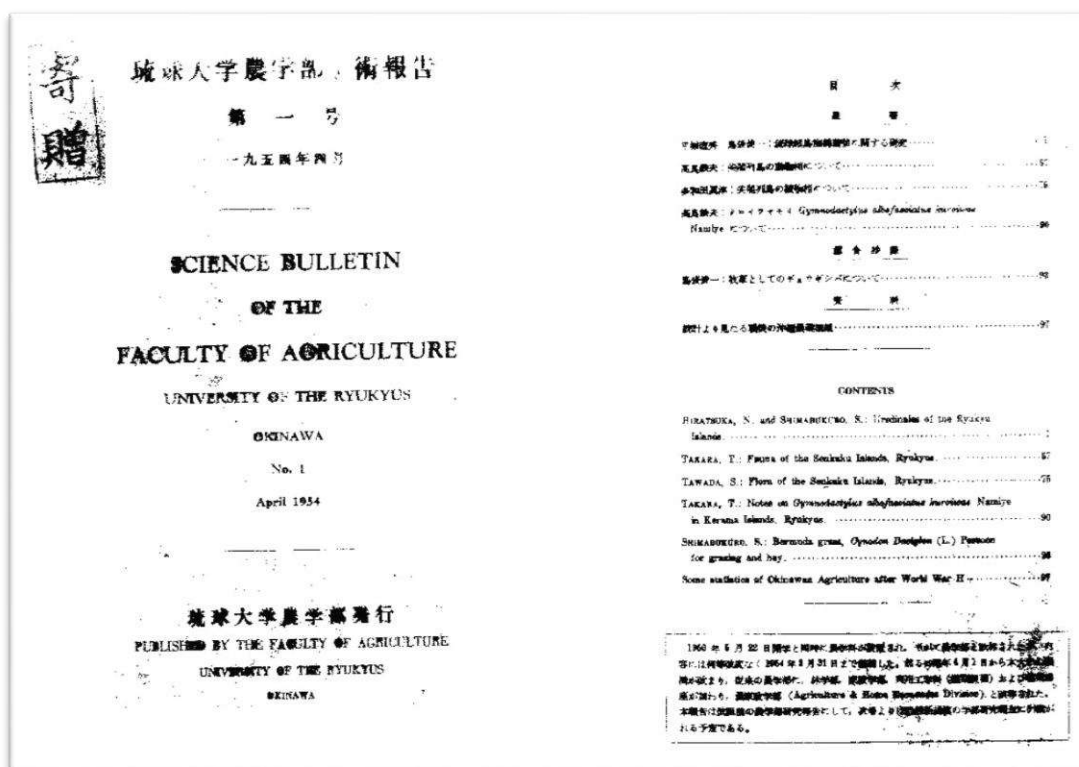
調査成果物

調査成果は、

「琉球大学農学部 学術調査報告第一号」（1954年4月刊）において
下記の論文として掲載された。

尖閣列島の動物相について
尖閣列島の植物相について

高良 鉄夫
多和田 真淳



高良助教授の動物相調査（第一次～三次調査）と多和田技官の植物相調査（第二次調査）についての報告である。

前者は、所産動物として採集並びに観察した哺乳類 5（2）種、鳥類 19（7）種、爬虫類 5（5）種、昆虫類 22（21）種、陸産貝類（淡水貝を含む） 9（9）種をあげている。*（ ）は採集種である。

後者は、植物景観、照葉樹林、頂上灌木帯について述べ、自生植物として羊歯植物 44 種、裸子植物 190 種をあげている。

尖閣諸島調査（第二次～三次調査）は、開学時の琉球大学が誇るべき快挙であり、農学部学術報告第一号が学術成果で飾った意義は大きい。

両者は戦後初の尖閣諸島生物相の学術論文である。